

あかあま

わが町、わが店、この道一筋。出逢いとコミュニケーション あかい新聞店ホームページ <http://www.akai-shinbunten.net> <発行所>あかい新聞店 武豊店/知多郡武豊町字金下37番地 ☎<0569>72-0356 常滑店/常滑市市場町4丁目167番地 ☎<0569>35-2861

クロスメディアを総合力でプロデュースする

PTC GROUP

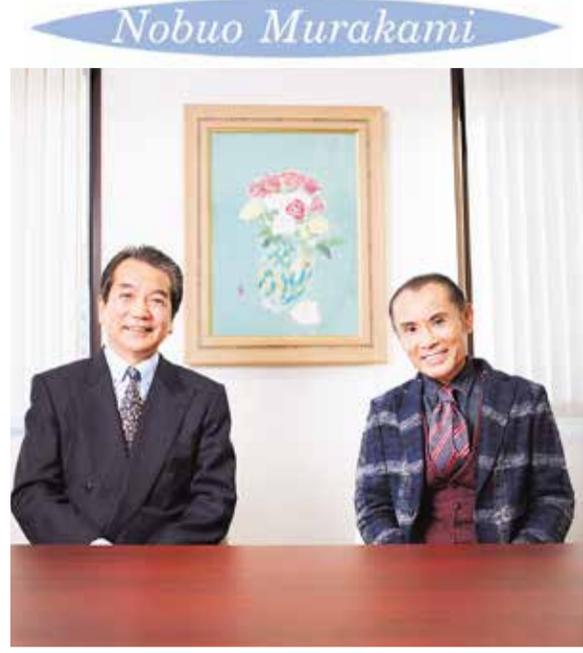
半田中央印刷株式会社

〒475-0032 愛知県半田市潮干町1番地の21
TEL 0569-29-2525 (代) FAX 0569-29-4500
<http://www.handa-cp.co.jp>

元氣のでてくる“ことばたち”

205

村上信夫



撮影・鶴崎 燃

ていねいに咲いているってすごいと目が釘付けになった。人がそこにいようがいまいが自分の生を全うしていると感じた。

それまでは、花というものにまったく関心がなかった。花の名前も知らず、鶴

いろいろなことをやってきて、なんでも最初からうまくできないとわかってきた。ボクシングの練習でも、最初は縄跳びがぜんぜんできなかったのに、毎日ひたすら練習していたら一か月くらいで早く飛べるようになった。だから絵もじつじつと時間をかけて、毎日描くしかないと考えた。誰にも習わず、自己流で描き続けた。何回も何

■村上信夫プロフィール

2001年から11年に渡り、『ラジオビタミン』や『鎌田實いのちの対話』など、NHKラジオの「声」として活躍。現在は、全国を回り「嬉しい言葉の種まき」をしながら、文化放送「日曜はがんばらない」(毎週日曜10:00~)、月刊『清流』連載対談~ときめきトークなどで、新たな境地を開いている。各地で『ことば磨き塾』主宰。1953年、京都生まれ。元NHKエグゼクティブアナウンサー。これまで、『おはよう日本』『ニュース7』『育児カレンダー』などを担当。著書に『嬉しいことばの種まき』『ことばのビタミン』(近代文藝社)『ラジオが好き!』(海竜社)など。趣味、将棋(二段)。
<http://murakaminobuo.com>

腹の主の声にしたがう

俳優 片岡 鶴太郎さん

片岡鶴太郎さんは、お笑い芸人、ボクサー、役者、ヨガ、画家…すべてを超人的に極めている。ストイックに見えるが、ご本人曰く、すべて「快樂」だそうだ。

椿が教えてくれた

1歳違いの同世代。年を重ねるのが楽しいのではと水に向けて「楽しいですね。僕は38歳くらいのときにどん底の気分を味わったことがあるので、なおのことそう思います」と答えて返ってきた。

鶴太郎さんは、20代でお笑い芸人として人気者になり、30代に入り、役者としてもドラマや映画で脂の乗った仕事をしていた。それらがすべて、引き潮のようにサーッとなくなってしまうのが38歳のとき。ボクシングでは、セコンドについていた世界チャンピオンの鬼塚勝也選手が引退し、時を同じくして自分の出演するドラマもなくなった。

「浜辺にボツンと取り残されたような気分になっちゃって、自分の生き方がまったく見えなくなっちゃったんですよ。自分の魂の情熱をかけられるものはあるのか…鬱々とした毎日を送っていました」

そんな38歳の、2月の寒い早朝。仕事に行くため、朝5時に自宅を出ようとしたとき、視界の隅に何かの気配を感じた。見ると、隣家の庭に赤い花が咲いていた。こんなに寒くて誰も見

腹の主が教えてくれた

鶴太郎さんは、小さい頃から決断を迫られるようなときや人生の分岐点で、「腹の主」の声が聞こえるそうだ。耳をすませていなければ、聞き逃してしまうようなささやかな声だ。その声「絵を描け」と言った。それまで絵を描いたこともなく、描き方もわからないのに…。

椿を描こうとしたが、ぜんぜん描けない。椿に魅せられた思いがあまりにも強くて、その思いと描いた絵のギャップの違いに打ちひしがれてしまった。だが、ここで諦めたら、出口が見えない鬱々とした日々に戻ってしまうような気



俳画/イネ・セイミ

回も描いているうちに手ごたえが出てきた。絵を描き始めて3年後、ようやく椿の絵を発表した。鶴太郎さんは椿だけでなく、鯉も大好きだ。鯉は、何匹も池の中にもいてもケンカしない。歯がないから噛み合うことがない。餌も自分の分を食べ終わると、あとは食べていない鯉に譲って分け合う。人懐っこくて、手を出すとなめてくれる。100年以上生きる鯉もいるくらい生命力が強いのに、まな板に載せたとたん「どうでもしてくれ」といわんばかりに、ピタッと動

「画家でもあり役者でもあり、芸人でもある。朝から何時間もヨガや瞑想をし、絵に集中するストイックな部分があれば、バラエティー的なおもしろい鶴太郎さんもあります。どれがいちばん自分らしいと思いますか。」

鶴太郎さん即答「すべてです」。「人間って多面的でしょう。僕はその窓口を全部開けていられるだけです。よくストイックだといわれますが、僕自身は快樂主義だと思っています。朝、仕事をやる6時間前に起きて、ヨガや呼吸法、瞑想をするのも、自分が楽しいからです。一日が健康やかに過ごせて、体調もよくなる。2時間かけて野菜中心の朝食をとるのも、自分の快樂のため。ベジタリアンってどういうものか知りたくてやってみたら、3日目くらいから体が変わってきたんです。要はすべて自分のためなんです。何事も否定的にとらえず、肯定的に受け止めるようにしている。東京の下町育ちで、貧しいながらも家族団欒があって、親に連れられて寄席に行ったり…、そういう子ども時代を過ご

人は、ことばで磨かれる

好評発売中

対談!



■イネ・セイミプロフィール

フルート奏者として活躍中。俳画家。絵画を幼少より日展画家の(故)川村行雄氏に師事。俳画を華道彩生会家元(故)村松一平氏に師事。俳画の描法をもとに、少女猫等を独自のやさしいタッチで描いている。個展多数。

インディアンフルート教室 開講いたします。

誰でも簡単に音が出せる楽器です。あなたも今日からインディアンフルート教室に入会受付中!!

何か始めたいと思ってる貴女へ、数年後、素敵にフルートを奏でる姿がそこあります。楽しく個人レッスン致します。

講師 イネ・セイミ
(日本インディアンフルートサークル協会ディレクター)
レッスン:30分3,500円 会場:半田市柳ヶ丘
申込み 0569-89-7127
お問合せ seimi@oasis.ocn.ne.jp

俳画教室開講中

常滑屋

とき 俳画教室月一回 午後一時~三時

会費 一回 二、二五〇円(三ヶ月分前納制)

問合せ ☎〇五六九(三三)〇四七〇

新シリーズ ヒューマンライフ

『新・現代家庭考』 就職

—自分ドラマつくろう— (55) 岡田 清治

姪の就職2

「はじめは手紙の差出し人の女性のことがよくわかりませんでした。日付を見ると、お母さんと結婚する前に付き合っていた女性だということが明らかになりました」

「なるほど。手紙だけでは断片的で他人にはわからないことが多いだろうな」

「とにかく、父を批判していることはわかるのですが、なぜ批判するのかということがつかみませんでした」

「その中にインドのことが出てくるんだね」

「そうです。それも何回も出てくるんです。インドを直視したら自分がどういう位置にいるかがわかるのだから、父にもインドに行つて貧困とか階級というのを知ることが書いていました。父は日本でもるま湯につかっつてプチブルでえらそうに世の中を批判しているが、とんでもないことだといふのです」

「叔父さんはこの件については健太郎の悩みの相談のつたので、比較的知っています」

「そうですね。彼女は大学生で父は三人の子供がいる中高年ですね。新聞記者だし分別のつくはずですね。どうして彼女に魅かれたのですか」

「要するに一言で言えば、男の性だと叔父さんは思っている。石川達三の『四十八歳の抵抗』という本があるが、健太郎はまさにそれだろうと、当時は想像した。それでも理性が働いてのめり込むことはないと楽観視していたね」

「よほど魅力があったのですか」

「それは叔父さんにもわからないが、初めは友達感覚で映画同好会のようなところで知り合つてお茶を飲む程度だったと思う。そのうち、自宅に招き家族と夕食をともにするなど親しく付き合つていった」

「自宅に招くということは、彼女の信頼を得ますね」

「やがて彼女の宿にも出入りし、彼女が活動する政治団体の仲間とも付き合つていたようだ」

「それだけなら自殺するようなことはないですよ」

「兄弟でも内面まではわからない。叔父さんの理解では彼女から結婚をすつこく迫られたようだ。本人も離婚を決議して結婚する気になつてた。とはいっても三人の子どもの親だから突然、離婚をしたと言つても、相手があることだから簡単ではない。そのうち親父はその女性のことを調べ、叔父さんに報告した。それによると世界平和を求める活動集団に所属していることがわかり、若気の気まぐれのようなのだといふのです。つまり健太郎が離婚までして再婚するほど魅力はないので、私に健太郎を説得して欲しいとどめるようにしてほしいと電話をしてきたのです」

「結局、うまくいかなかった。それで健太郎の女房

は決心して弁護士に依頼、離婚調停をすすめたのです。健太郎は相手の要望をほぼ一〇〇%受け入れ、離婚が成立するのにも時間の問題だと思われしました」

「よくわからないのは、前の奥さんとなぜ、別れることになつたのですか」

「実はそこが一番のなぞなんだ。実家で会つてい



写真：日間賀島(著者撮影)

時も二人は恋人のように仲睦まじくふるまつていたよ。いい年齢してという場面が何回も見ていたから、離婚なんて想像もできなかった」

「原因があつたのですか」

「彼女の登場が彼の人生の歯車を狂わせたのだらうと想像しているのだが…」

「叔父さんに相談はなかつたのですか」

「なかつたね。仮に相談されても一直線に進んでい

たから気持ちを変えられなかつたと思う。本人も変えるのが怖かつたのかもしれない。五十歳に近い男が道を踏み外すことはないといふ軽く見ていたところはあつた」

「それで離婚には時間はかかつたのですか」

「いや、三月ほどで離婚手続きは終わったのだよ」

「だつたらなぜ、彼女は自殺したのですか」

「いまとなつてはわからないのだが、焦つたのか、それとも離婚させること、つまりぬるま湯から放りだすことが目的なのかと推測するのですが…」

「父は自殺を知つてどうでしたのですか」

「もちろん、ショックを受けていました。それで彼女の故郷へお詫びをかねて墓前に花を奉げに行きました」

「相手の実家のご両親は受け入れたのですか」

「そこは詳細がわからないが、帰つてきたときに『相手の両親は許してくれた』と言、話しただけだつた。叔父さんもそれ以上、突つ込んで聞こうとしなかつた」

「不可解ですね。普通は若い娘をたぶらかして自殺に追い込んだと非難してもおかしくないような気がするのですが…」

「そうなんだよな。ただ、彼女が両親に送つた手紙に健太郎のことを報告して、近く離婚して自分と再婚すると書き送つていた。いい男だからそのうち紹介しますとも…」

「それは救いですね」

「ところがある週刊誌の知るところとなつたので、健太郎の周辺を取材していることがわかつたのです」

「この件は週刊誌のネタになるのですか」

「自殺だから普通ならならぬと思うが、やはり現

代版『四十八歳の抵抗』的に書こうと思えば書けるのかも。狙いはわからなかつたが、とにかく健太郎と二人で親類、家族などにかん口令を言い渡した。その効果があつたのかどうか、とにかく報道されることはなかつた」

「大変でしたね」

「これが書かれるとみんなに迷惑をかけるから必死だつたね。ところで舞さんはなぜ、インドへ行きたかと思つたの？」

「はじめは手紙を読んで漠然とインドという国をイメージしてました。ある手紙に健太郎さんも一度、『不可触民』という本を読んでくださいとい

てありました。そのことがずっと気になつてい

ましたので、父の蔵書の中にかと捜しましたらA4の茶封筒の中に大事にしまつてあり

ました。就職がうまくいかないの、父の書齋に入つて再びこの本を手にとつて読み始めました。そのうちの経つのも忘れて没頭している自分に不思議なものを感じたのです」

「そうだと、就活は休止してインドに行こうと思

ちました。先輩の一人がインドに滞在していることを思い出したのです。それで手紙を書き、様子を聞いたのです」

「真三はいよいよ本題に入つてきたことで、なにかほつとする気分になつた。すでに食事の盆は下げられ、ほうじ茶の入つた湯呑が二つテーブルに残されていた。お客はまばらで、それぞれ談笑を交えながら話し込んでいる様子が散見された」

「友人はインドで何をしていますか」

「よくわからないのですが、大学に通つて語学を勉強しているといふことでした。一度、たずねてもいいかと聞きましたら、ぜひ、おいでよと返事をくれました」

「それでインドのパンフを集め、連休に渡航しようといふ計画を立てたのだね」

「そうです」

「お母さんがそれを知つて、二人で話し合つたの」

「そうですね。ただ連休にインドの友人のところに出かけると伝えただけです。まだインドで何を

するかも決めていなかったの、話すこともなかつたのです」

「就活の時期に、内定もしていないのにインドへ旅行すると言へば、心配するのは当然だね」

「だけど、面接でも聞かれたのですが、会社で何をしたいかと。でもよくわからないので、うまく答えられなかつたのです」

「面接では家族のことや思想・信条についても聞かれたの」

「家族のことは聞かれませんでした。用紙に書く欄があつたと思います」

「片親だとハンデイがあると感じた？」

「あまり気にしていませんでした。就職の本にも人物本位である書かれていましたので…」



プロフィール

著者：岡田清治(おかだせいじ)

一九四二年生まれ ジャーナリスト

(編集『ロクダクシオン』NET108代表

著書に『高野山開創二百年い

ばんさん行状記』『心の遺言』あな

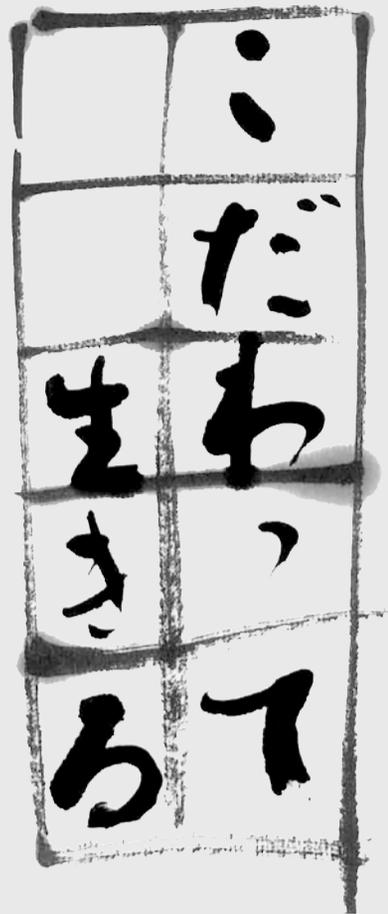
たは社員の全能を引き出せませ

か！『リヨンで見た虹』など多数

※この物語に対する読者の方々のコメント、体験談を左記のFAXかメールでお寄せください。今回は「就職」「日本のゆくえ」「結婚」「夫婦」「インド」「愛知県」についてです。物語が進行する中で織り込むことを試み、一緒に考えます。FAX：0569-347971

メール：takamitsu@akai-shinbun.net

絵手紙集



絵文 椋山善久

返文 小林玲子

椋山善久

昭和十一年碧南市で生まれる。丸栄陶業株式会社代表取締役。碧南商工会議所会頭。愛知県陶器瓦工業組合理事長。全国陶器瓦工業組合連合会理事長などを歴任。平成二十三年藍綬褒章受賞。平成二十二年旭日小授章受賞。丸栄陶業株式会社取締役会長現在に至る。京都造形芸術大学・通信教育部芸術学部美術科・洋画コース大学院修士課程一回生。

小林玲子

碧南市に育つ。西尾市在住。共著「西尾の民話」童話「サケの子ピッチ」随筆「海辺のそよ風」(中経コラム「閑人帳」より)ミュージカル脚本「めぐりちゃんのおうち」ほか

長老に
あやかりたいと
菊の宴



重陽・菊の節句 旧暦 9月9日

日本には古来、季節の年中行事の
節句として、旧暦7月7日「人日の節句」、
七月七日「七夕の節句」、八月の節句・桃
五月五日「端午の節句・菖蒲節」、
七月七日「七夕の節句・せせ」、九月
九日「重陽の節句・菊」の五節句
があり、季節の旬の植物から
生命力をもらい邪気を祓う
という風習があり、その十月十日
(旧暦九月九日)に友人と二人にて、
菊畑と合食(菊)つまみ(とつまみ
岡島(平谷)翁(百三三)翁を訪れ
長老の誕生日を祝い、その晩に
あやかりたいと菊の宴を催しました。

温顔福相の翁の肖像は
穏やかな中にきりりと締った
意志の強さが感じられます。
人生の達意の像ですね。
重陽の節句の菊酒は
さぞ香り高く五臓六腑に滲みたことでしょう。
一杯一杯復一杯楽しい語らいが見えるようです。
私共にお見舞いのお言葉頂きありがとうございます。
気弱な夫婦が病みますと目も当てられません。
ひたすら嵐の去るのを待つております。
よい季節です。ご活躍下さいませ。
かしこ

